

会員の広場



ヴィクトリア朝における大学拡張講師職

上智大学名誉教授 香川正弘

はじめに

成人教育運動の個々の学習活動では、受講生が学習によってどのように変容していくかという観点から見るのが重要である。このことでは教授側の果たす役割は決定的に重要である。イギリスの成人教育史で教授側が受講生の学習指導で特に重要な役割を演じたのは、産業革命期における新しい発明を「知の普及」の観点から講座として提供した専門的講師の活動と、近代における大学拡張運動における講師（拡張講師）の二つが注目される。前者は、運動体としての組織を持つものではなかったが、社会の学習ニーズに応じて自然発生的に成立した。講師は、一定期間ひとつの町に駐在して講座で新しい科学の原理と実験からなる講義を行い、次々と町を遍歴していった。彼らは講義（と著作）をすることによって生計を立てており、イングランドだけでなく全英の各都市を回り、アメリカにまで遠征をした。こうした講師は「旅する講師」（itinerant lecturers）といわれ、マニファクチャラーや職人に起業の精神と産業発展を促す役割を果たした⁽¹⁾。

「旅する講師」という言葉は1873年から始まる大学拡張運動の講師（extension lecturers 拡張講師という）でも使われた名称である。大学拡張は「大学教育を地方都市の社会人に開放」することを目的に始まった成人教育運動で、今日云う地方都市への出張講座（出前講座）と学内での開放講座（夏期講習会）とから構成されていて、講師には大学教育レベルの社会人教育を行うことと、一人の講師が4つの町を一週間掛けてまわって専門的な講義を行うことが課せられていた。産業革命期の「旅する講師」と比較すると、大学という組織の一員として講師職を務めたこと、内容的に科学技術だけでなく、人文・社会・科学という広い範囲で専門家として登用されていたこと、短期間で職種を変えていく講師が多かったことなどに相違を認めることができるが、「旅する講師」という発想、その講師を受け入れる町の態度には、共通するものがあつた。しかし、時代は変わり、産業革命期の「旅する講師」は、大学拡張の講師と大学に籍を置く講師にとって変わられることになる。

ヴィクトリア朝の拡張講師の研究は、「知の普及」の観点から大学拡張の本質を解明するのに不可欠な研究対象であるので、大学別や学問分野別に先行研究が蓄積されている⁽²⁾。本稿は、ヴィクトリア朝における大学拡張講師とはどのような職業であつたかを、任用、

資質、その後のキャリア形成の観点から考察したい。

1 ケンブリッジの大学拡張講師の登場

(1) 大学拡張講師の必要性

大学拡張の問題はイングランドの二つの大学が国民大学に脱却するために起こった。1830年代から国教徒しか在学できない制度、また大学教育の内容が社会が求めている課題の解決に何ら役立たないということも問題に上げられ、大学改革を検討すれば大学拡張もまた論じられることになる。この問題は1850年に設置されたオックスブリッジの両大学の総合的な調査検討委員会の主要な議題となり、そこで出された答申により、1850年代から60年代にかけて教員組織、教授科目、カレッジの運営等の改革が進み、最後の仕上げで1871年に大学宗教審査法廃止法が議会を通過して学内の開放体制が確立された。そして、すぐに学外への開放体制が問題となり、今日いうところの大学拡張へと関心が移っていった。学内の開放体制から学外へ出て行く開放体制への転換を主張したのが、1871年にケンブリッジ大学に提出されたジェイムズ・スチュアートによる大学拡張に関する提案である。

同提案の背景には、1867年以来、トリニティ・カレッジのフェローの立場で、女教師や労働者に対し北部イングランドを中心に巡回講座を行ってきた実践経験（実質的な最初の拡張講師）があり、それまでの輪講形式の講義方式を大学教育方式を導入して一変し、社会人の高度な学習ニーズに応える講義と学級（指導）に改めた。その実践での問題点は女教師研修企画が拡大して行くにつれ、多様な専門科目を担当する講師の安定的な確保に苦慮していたことがあった。講師の確保の問題については、大学教育レベルの社会人教育を担当できる人材として、自分と同じような立場にある大学人の活用を考えた。折から1860年代の大学改革において問題になっていたひとつは、大学の基本財産の使い方に関するものである。その基本財産は人件費にも充てられる。問題は、カレッジでの職務を何ら行わずに、フェローという教員でありながら、教育に従事していない者（カレッジに寄宿しない有閑フェロー）が多数いたことである。たとえばケンブリッジではフェロー職は350から400あったが、そのうち教育の職にあるフェローが100人で、何も義務を課せられないフェローが250人いたし⁽³⁾、オックスフォードでも同様な状態であった。この問題の解決策としてスチュアートが提案が大学拡張講師への活用であった。

スチュアートの大学拡張提案で講師に言及した提案で重要な点を抜き出して指摘すると次のようになる。

成人教育における教師の問題

・社会には、大学に来ることのできないが、系統的な性格をもった高等教育を求める願望が広範に存在している。しかし、成人の教育で提供されている状況は、コマギレの輪講である場合が多く、教育に値しない。労働階級へ継続的に高度な種類の教育を提供しよう

とする教師たちは、十分な学識をもっていない。

・日常生活に忙しい受講生が無知であればあるほど、教えようとする者は、自分が教えようとする水準を遙かに越えてその担当科目によく精通していることが必要である。そうでなければ、含蓄もなく消化もされていない事実をただ伝えるだけである。

カレッジの有閑フェローを講師に活用する提案

・教授活動の継続性と教師の側のしっかりした学識という二つの条件を結合できるのは大学で、大学及びカレッジの教員の仕事である。カレッジには、なんら特別な仕事を与えられていないフェローがたくさんいる。そうしたフェローに、フェロー給与を受ける条件に地方都市を巡回して講義する仕事をするようにしてはどうだろうか。そうすれば、フェローの処遇問題も解決するし、成人教育も教育となる。また、そうした巡回講師の定着で地方都市に拡張カレッジが作られていくとも予想される。

このような論理で、成人教育を科学化するために、大学の教員を充てることを提案したのである。この提案は大学当局によって採用され、1873年から75年にかけてスチュアートの指導のもとに実験的に大学拡張講座が実施されることになった。

最初の大学拡張講座は1873年秋学期にノッチングムで3講座、ダービーで3講座、レスターで2講座という三都市のサーキット（巡回路）で提供された。スチュアートが選んだ最初の拡張講師は、「政治経済学」講座には、トリニティ・カレッジのフェロー、V.H.スタントンが選ばれた。彼はこの講座を担当する直前に叙階を受け、リーズの婦人教育協会が主催した講座で、すでに「政治経済学」の科目を担当していたからである⁽⁴⁾。「英文学」講座の担当者は、トリニティ・カレッジのフェロー、E.B.バークス師、「力と運動」講座の担当に同カレッジを卒業したばかりのT.O.ハーディングが選定された。続く春学期でも同様な基準で、「天文学」担当にハーディング、「イギリス憲政史」担当にE.S.トンブソンが、また未確定であった講座「自然地理学」担当にセント・ジョンズ・カレッジのフェローJ.J.W.ティールが選定された。拡張講師は12回から構成される講座を一人で担当した。

この任用から見ると、スチュアートの拡張講師選抜は、専門性のある優秀な大学教員（フェロー）におかれていたことがわかる。最初の拡張講師となった3人はいずれもケンブリッジ大学が育てた最優秀な人材であった。スタントンとバークスはともにダブル・ファーストといわれる二科目最優等生であったし、ハーディングは1873年の数学優等生試験の首席合格者であった⁽⁵⁾。拡張講師の任用にフェローから選ぶという方針は、秋学期と春学期を通して見ると実際には3名で、後は就職待機組の卒業生であった。現役のフェローと就職待機組の卒業生を拡張講師に任用するという方針は、大学拡張提案で述べた方針通りにはいかず、以後、この修正方式で進められることとなった。また、講座担当の報酬は俸給ではなく、謝金で支払われることになった。

1873年秋学期に採用された最初の拡張講師3人は、講座の領域によってスチュアートによって一本釣りで選ばれたと思われるが、翌年からは大学拡張運動が全国に広がっていったので、拡張講座開設を求める地方都市のニーズに合わせて、多くの拡張講師を採用しなくてはならなくなった。スチュアートは講座領域、たとえば「文学」、「政治経済学」、「芸術」、「物理学」といった分野別で1-2の拡張講師の確保を目指した。この時期に1874年に採用された拡張講師に、後の大学拡張運動を支えることになるW.M.イード、W.カニンガム、R.D.ロバーツ、R.G.モウルトン、T.J. ローレンス（「国際法」担当）がいる。イードは「政治経済学」担当の講師としてスチュアートが採用、カニンガム（「政治経済学」担当）はトリニティ・カレッジのフェローになれなかったところをスチュアートとイードが説得をし、モウルトンはイードが拡張講師に採用した。同様に両者の説得で、クレア・カレッジに属していたロバーツも「地質学」の拡張講師として採用された⁽⁶⁾。こうした一本釣りでは拡張講師の需要をまかないきれないので、副学長は『ケンブリッジ大学公報』第57号で「ジェントルマン」に拡張講師志望者を募る告示を出した⁽⁷⁾。この告示の効果があってか、スチュアートのもとには希望者が多数応募したという⁽⁸⁾。

拡張講師にどのような人材を採用するかという方針は、地方講義特別委員会（大学拡張委員会）の事務局長の判断による。1873年から75年にかけて事務局長はスチュアートであったが、1875年にスチュアートとスタントンがペアを組んで事務局を運営し、ついでG.F.ブラウンに変わった。1876年度のケンブリッジの年報に記載された拡張講師を見ると、同年度には秋学期に51講座、続く春学期に38講座が開講され、それらの講座に登用された拡張講師は全部で16名であった。そのうち、現役のフェローは3名、フェローを離職した経験者が2名、残り11名は出身カレッジのみが記された卒業生であった。拡張講師で5講座以上をもった拡張講師を数えていくと、カニンガム（卒業生）が13講座、H.E.マルデン（卒業生）とJ.ドソラス（卒業生）が各10講座、イード（卒業生）とJ.ゴウ（フェロー）が各7講座、J.E.シメズ（卒業生）が6講座、E.カーペンター（元フェロー）が5講座という順になる⁽⁹⁾。1875年度の拡張講師への支払い調書調書が残っているが、それによるとモウルトンは秋学期に175ポンド、春学期に140ポンドの謝金を得ている⁽¹⁰⁾。専門職などに就職した卒業生の年収を比較すると収入は相対的に低いかもしれないが、それでも就職待機組にとっては学問を教えることのできる拡張講師は、それなりに人気のある仕事であったことがわかる。

拡張講師の仕事の内容は次のようなことが課せられた。講座講義に入る前の段階では、講義のシラバスを作成し大学拡張事務局長の承認を得て小冊子にして印刷すること、次に講座開講式で講座について基調講演を行う。次に実際に講座を担当する段階になると、一週間のうちに3ないし4の地方都市を鉄道を使って廻り、訪ねた町で世話役の家に宿泊し講義をすることになる。講座は講義の日（例えば月曜日）と学級の日（例えば金曜日）が別々に設定されることが多いので、これで一週間の講義日程が埋まる。講義では毎回受講生に課題レポートの提出が求められるので、週末には自宅に郵送されてくるレポートの点検とコメントをつける。12回の講義が終われば最終試験を実施し採点し、評価表を事務局

に提出する。講座修了後には修了証授与の式典に出席する。このような仕事内容からすると、自分の担当科目についての研究、それぞれの町の歴史的文化的な背景や人々のニーズの研究が不可欠で、それに加えて何百マイルも旅して講義をすることと、多量のレポートへのコメントで激務であったと思われる。

2. オックスフォードの大学拡張講師の登用

ケンブリッジで発達した大学拡張は、1876年にロンドン大学拡張協会の形成を促し、1878年にはオックスフォードがこれに参入した。同協会の拡張講師は、スチュアートが講座運営のための大学合同委員会の座長に就任していたので、ケンブリッジとオックスフォードのフェローが主に採用された。オックスフォードでも有閑フェローの問題はケンブリッジと同じ状況にあり、400人のフェローのうち200人がそれに該当していた。学内の社会人対象教育議論が低調であったため大学拡張への参加が遅れたものの、1878年にA.D.H.ア克兰ドが地方試験特別委員会の事務局長に就任してやっと講座を提供することになった。オックスフォードはケンブリッジの大学拡張の原則に従って事業を行うことを確認し、最初の拡張講師はオール・ソールズ・カレッジの元フェロー、A.ジョンソンを採用し、バーミンガムで「17世紀イングランド史」という講座名で実施された。その他数人雇用されたが、あまり成果はなく尻すぼみとなり、本格的な開始はM.E.サドラーが事務局長になった1885年からである。

サドラーは意欲的に大学拡張講座を再組織して、意欲的に取り組んだ。その特徴は、ケンブリッジに対抗して連携団体を作り、労働者や女性を意識して対象を特化した講座を導入し、6回講義構成の講座でもってイングランドで新しい役割を果たすことを目指した。1885年度における大学拡張講座の地方センターは22、雇用された拡張講師は13名、開設講座数は27、受講生数は6千人であった⁽¹¹⁾。拡張講師の内訳は、1名がダブリンのトリニティ・カレッジの出身である以外すべてオックスフォードの出身者で、現役フェローは2名、学寮長が1名で、残りの講師は就職待機組であったと思われる。この講師陣には、事務局長のサドラーが「政治経済学と産業史」を4都市で4講座担当したのも含まれる。翌年の1886年度には、地方センターは57、雇用された拡張講師は18名、開設講座数は67、受講生総数は9908人に急拡大した。そして1890年度には、講座が開設される地方センターは122、雇用された拡張講師は31人、開設講座数は192、受講生数は20248人へと急成長していく⁽¹²⁾。1885年度と86年度の拡張講師を比較すると、両年度を通じて拡張講師を務めたのは5名で、85年度で8名が辞め、86年度には15名を新たに採用したことがわかる。拡張講師は通常は数年間継続して務める携行が見られたが、サドラーの初年度は少し違っていた。

入れ替わりの頻繁さに拡張運営の脆弱さを危惧して、オックスフォードは、1886年には早くも、経験豊富で成功する拡張講師を核にして「旅するユニバーシティ・カレッジ」(an itinerant University College)のスタッフ講師(以後は上級拡張講師)を持つ必要があると考えた⁽¹³⁾。この構想は拡張講師を維持する基金を作り、ベテランの講師には受講料からの謝

金に基金から 250 ポンドを加給して、拡張講師の謝金だけで生活が送れるようにし、そうした専任講師職を 3-4 人ほど設けるというものであった。1885 年度には受講料から総額 1200 ポンド講師に謝金を支払っているが、これはフェロー職の給与で換算すると 6 人分に相当する（即ちフェローの年報は通常 200 ポンド）から、拡張講師職をより魅力的な専門職にするためであった⁽¹⁴⁾。具体的に想定された拡張講師は、ベリオール・カレッジを卒業した「イギリス史」担当の W.H.ショーと、クライスト・チャーチ・カレッジを卒業し「自然地理学」担当の H.J.マッキンダーである。こういう構想のもとに拡張講師のための基金が集められることになった。

1887 年には大学拡張委員会と地方都市の代表との合同会議が両大学で開かれた⁽¹⁵⁾。3 月にケンブリッジで開かれた会議では、オックスフォードで提案されていた拡張講師の恒久的な確保のための基金をケンブリッジでも設け、フェロー職に位置づけることが提案された。事務局長の G.F.ブラウンは、基金を作ることを意味を、拡張講師の不安定な仕事を保証する意味があること、若い志願者を確保すること、拡張講師の報酬を年々上げていくこと、ベテランの拡張講師には繁栄している地方センターではなく、貧しくて講座が成り立ちにくいセンターへ行って貰いたいこと、などをあげて賛同を求めた。スチュアートは、これを中央基金とし、地域に定住する拡張講師の費用に充てることを提案した。オックスフォードでの会議は翌月開かれ、ケンブリッジでは、拡張講師志願者が多数出ていることを念頭に、どのようにすれば継続的に優秀な拡張講師を採用できるかについて議論があり、前年に提案されていた基金に基づいて、ショーがスタッフ拡張講師として正式に任命された⁽¹⁶⁾。

1887 年当時、拡張講師陣には、一時的に講師職に就く者、カレッジのフェローと兼務する者、専従して講師職に就く者という三種類があったが、上級講師職がオックスフォードで設けられたことにより、両大学の拡張講師は上級拡張講師 (senior lecturer, オックスフォードの場合は Staff Lecturers、ケンブリッジの場合は主席講師 Superintendent Lecturers と呼称) と下級講師 (junior lecturers) という職位が作られることになった。地区に貼り付ける組織化担当の拡張講師もこの上級拡張講師に含まれる。また、拡張講師組合も作られ、鉄道事故への障害補償や病気のための休職に救済措置、謝金に加給する積立金の基金を作ることも整備されていった。

3. 拡張講師に求められる資質

大学拡張の講座を担当する拡張講師は、その大学を大学教育で一般学生に教える場合よりも、特別な資質が求められた。この点については、スチュアートが 1873 年の講座開始に当たり講師に授業の持ち方と指導の留意点をまとめた指示書があるが、それを基に勤務態様の実態と当時の多くの人々が社会人受講生の評価やなどを参考にして、採用基準や資質論を書き残されている。これについて詳述しているのはマッキンダー・サドラー共著の『大学拡張』をあげることができる⁽¹⁷⁾。二人は実際に採用人事を行った経験があるので、事務局がどのような人材を拡張講師に求めていたか、またどのような任用手続きをとってい

たかを明らかにしておきたい。資格要件としては次の条件があげられている。

第1の条件は、身心ともに壮健であることである。身体が強くあらねばならないというのは、長期間にわたり町から町へと長い旅行することで相当疲れるのが実際であるから、必要条件として最初にあげられた条件である。この「旅する拡張講師」というのは体力を必要とするので、健康状態が優れていることが前提になる。心が頑健であるということも求められている。多くの受講生を相手に繰り返しの講義を行うことからくるストレスに耐える精神力が必要とされたからである⁽¹⁸⁾。

第2の条件は、拡張講師の学識についての言及である。拡張講師はその大学の名前を額に書いているといわれるように、大学を知らない民衆は講師により派遣した大学とそこで大学の教育を考える⁽¹⁹⁾。従って、講義をするテーマとその関連科目について、教える資格があることを証明するために、大学で獲得した優秀な成績を有する者でなくてはならない。この優秀な成績とは卒業成績順位、学位、フェロー職、名誉ある学会員とかを示すものである。

拡張講師は担当する科目について深く精通していることは言うまでもないことであるが、それを表現する力、すなわち学者を特徴づける正確さと言語の明瞭さ、さらに流暢に話す力があり、健全な知識と多方面にわたる興味をもっていることも必要とされた。また、教える内容に関し、特に重要な点は誠実にして臨機応変に扱い、内容の部分の重要性を正しく印象づけて伝えることができるひとであらねばならないとした。

第3の条件は、社会人を対象とする教育であることに注意を促している。成人男女は生活経験があるので、講義内容が知識の広い分野のなかで占める位置を理解させ、彼等の注意を引く問題で語りかけることが必要であること、また、50人の受講生がいればさまざまな分野の50人のスペシャリストがいて、講師たる自分もひとつの分野のスペシャリストであるという意識をもって接し、知的共感を媒介にして、拡張講師と受講生が相互尊敬しあう関係を作らねばならない、また、受講生が持っている様々な知識や情報にどのように訴えるか、以前から持っていた様々な知識や情報にこの学習から基礎となるものを個人々人が見つけられるような方法を訴えていかねばならない、こうした教授能力をもつ人を求めた。

第4の条件は、拡張講師は講義と少人数のクラス指導だけでなく、大聴衆に対して講演をすることもあるので、登壇する講演者としての話術も持たねばならない。これは講座の最初でのオリエンテーションでの基調講演、修了証の授与式、地方での指導などでも求められることであるので、雄弁であることが求められた。

こうした資質が拡張講師には求められた。では実際に拡張講師を採用する場合は、どのような手続きがオックスフォードでは実際にとられたかも上述の共著から紹介しておこう。

- ①若い人が大学拡張特別委員会に願書を送付する。その場合、学位取得に必要な試験(卒業試験)にパスしていることが必要条件である。
- ②志願者は自分が提供する科目を教える能力を示すために、事前にカレッジのチューターに相談をしておくことが必要である。
- ③志願者は、既に公衆の面前で講義をしたことも示さなくてはならない。
- ④願書が受理されたら事務局を訪ね、大学拡張のシステムについて聞き、先輩の拡張講師と面談する。
- ⑤自分の講座のシラバスを作らねばならない。そのシラバスはベテランの拡張講師に提出され吟味を受ける。
- ⑥志願者は、シラバスに書いた講座講義をオックスフォードで開かれる有志の集まりで試行することが求められる。この講義では謝金は払われない。この試行講義はたいてい学校で行われる。通常は、教区の小学校教員養成カレッジで開かれる。聞き手は同校の多数の学生で、それに大学拡張委員会から事務局長と委員の一人が出席することになっている。講義の後、率直な合評会があり、カレッジのスタッフの批評が尊重される。
- ⑦試行講義が終わってから、再び志願書類が検討される。試行講義の評価が良くないと志願者は自ら志願を撤回するか、またの機会に再申請するように助言される。良くできた場合は、シラバスを書き直して再提出する。
- ⑧大学拡張委員会は、採用が内定した講師を実習生として幾つかの地方センターへ派遣し、先輩の拡張講師の仕事を観察実習させる。この費用は同委員会が用意する。
- ⑩これらのすべての仕事が終了すると、志願者は拡張講師リストに載せられ、書き直したシラバスが印刷されて地方センターに送付される。

以上に紹介したオックスフォードにおける拡張講師任用の手続きは、若い卒業生を対象にしたものと思われる。ケンブリッジでも同様な手続きで志願者の吟味が行われた。試行講義は、ケンブリッジ教員養成カレッジで学生と拡張委員会の委員の前で複数回講義を行っている。その時には、講義の時に言葉のなまりやアクセントのくせなどにも批評がされている。ロバーツによれば、こうした講師としての資質は「訓練を受けていない講師には滅多に備わっていない」⁽²⁰⁾と述べている。同大学の大学拡張委員会の第3代事務局長になったアーサー・ベリーは、志願書類に、学歴、公表した論文著作のタイトル、担当する講座目、成人教育の経験、判定者の氏名を定型化する改革を行った(25-1)。

4 拡張講師のキャリア形成

(1) 志願者の特性

ケンブリッジ大学拡張の初期の時代、拡張講師の採用は、先に述べたようにスチュアートによる適任者の一本釣り採用された。全国各地からの講座開設要望に応えるには、従来のような一本釣り採用で講師を確保することが難しくなると、『大学公報』に募集告知を

出して公募した。大学で学位を取得して就職待ちをしている志願者が応募した動機は、理想主義の考えから社会人教育によって社会の民主化を広げたいという考えの者、学内にまだ教授科目として取り上げられていない自分の専門分野の教育ができる魅力や学問と実生活のかかわりに関心を持っていた者、就職待機の浪人中に大学に籍を置いて大学とのつながりを維持できることを考えた者、日々の生計をたてたい者など、さまざまであったと思われるが、就職のための一時的なステップと考えて応募した者が多かった。一時的なステップとして拡張講師職を見るのは、この職の不安定さにも原因があった。ひとつには地方都市から講師を求めるリクエストの手紙が来ない場合は仕事なくなること、もうひとつは他の固定給与がある仕事に就く場合があることなど、一年間の収入を事前に計算することができないことがあったからである。

オックスフォードの場合は、ケンブリッジの志願者よりももっと社会改革意識が強かったように思える。それはアクランドが大学拡張の事務局長に就任したときに示されている。アクランドは叙階を受けていたが、聖職者としてではなく、労働者や女性を支援することで社会の改革を進めていくことを目指して大学拡張に当たった⁽²¹⁾。同じような精神はショーにも見られ、叙階を受けていても聖職者として働くことより、「良き市民の育成、少数者から多数者へという高い理想を広げるため、そして真に文化的教育的な民主主義」社会を形成したいと述べている⁽²²⁾ ので、サドラーの説得で拡張講師となったときの動機もコレで説明できるであろう。このように教会での司牧や説教よりも、人々の生活と学びにキリスト教の精神を生かす生かすということを目指して拡張講師になる若い人も見られた。拡張講師には多種多様な思想の持ち主がいたが、社会主義者が多く見られたのは、こうした背景があったからである。オックスフォードの初期時代(1885-87年)に拡張講師になったのに、「自然地理学」にH.J.マッキンダー、「英文学」にJ.C.コリンズ、「歴史」にショーやJ.A.R.マリOTT、「産業史」にC.G.ラング、「政治経済学」にL.L.F.R.プライスやH.L.スミス等がいて、ケンブリッジと同じように後の拡張運動を指導していく人々であった。

拡張講師はベテランを中心とする上級拡張講師と若い下級拡張講師に区分された。生涯を通じて拡張講師の職を貫く者はショーなどきわめて少なく、多くは転職していった。職業としての拡張講師を務めた後の経歴は、主に大学拡張雑誌のノート・コメント欄から講師の動向を追跡することができる⁽²³⁾。

両大学には、大学拡張講座を運営する大学拡張委員会があり、拡張講師はこの委員会の事務局に登録された。運営の責任者は事務局長であるが、この事務局長は拡張講師の経験者から選抜された。ケンブリッジの場合、初代がスチュアート、次が1876年にブラウンであるが、彼の時代に大学拡張講座担当の事務局長補ができて1878年にカニングムが就任、その後1881年にロバーツがなり、1891年に拡張講師A.ベリーが、次いで1894年にロバーツがその職を嗣いだ。20世紀に入っては1902年にD.H.S.クラナゲが事務局長に就任し、1924年までその職にあった。オックスフォードの場合、事務局長は、初代がアクランド、次いで1885年にサドラー、1895年にマリOTTが就任し1920年まで務めあげた。これら

の事務局長は全員が拡張講師から選ばれている。また本論文で両大学の初期の時代に拡張講師となった人の多くは、拡張講師職で生活する上級講師にほとんどがなっている。

次に目につく転職先は、大学の教授、講師、フェロー職への永久就職である。母大学の教授になったのはケンブリッジの初代拡張講師でもあったスチュアートが1875年に初代の工学部「機械学」の教授、次いでスタントンが「神学」の教授になったのを皮切りに、J.E.マーが「地質学」の教授、J.H.ローズが「海軍史」の教授、ロバーツは一時「地質学」の講師になっている。オックスフォードではF.ゴッチが「生理学」の教授、F.Y.ポーウェルが「近代史」の教授、E.B.ポウルトンが「動物学」の教授などに就いている。無論、学内カレッジのフェローになった人は多い。また、地方センターから拡張カレッジに成長したレディング・カレッジの初代校長には、1892年にオックスフォードの上級拡張講師マッキンダーが、1893年にはエクセター・カレッジの初代校長にケンブリッジの上級拡張講師A.W.クレイドンが、1896年にはコルチェスター・カレッジのケンブリッジの拡張講師F.レイクが初代校長になった。アメリカの大学へは、ケンブリッジの拡張講師で最も優れているといわれたモウルトンが1894年にシカゴ大学の英文学教授に招聘されて渡米したし、コーネル大学へはM.スティーブンスが、ミシガン大学へはグラスゴウのR.M.ウェンリー教授も異動した。新興の地方市民大学や植民地の大学教授になった人も多い。

その他の分野では、高位聖職者、政府機関の職員、雑誌編集者、学校長、国会議員などが多い。高位聖職者はイードが後にダラムの主教座大聖堂名誉参事会員を経てウスターの主任司祭、カニングラムがエリーの大主教、C.G.ラングがカンタベリー大主教(在位、1928-42年)となった。拡張講師から国会議員になった初めは1884年にハックニー選挙区から選出されたスチュアートで、1906年にはH.ベロック外9名が議員として在籍していたし⁽²⁴⁾、政府の要職についたのにアクランド、サドラー、H.H.アスキスがいた。アスキスはオックスフォードの出身で1876年ロンドン大学拡張協会で「政治経済学」の拡張講師を務め、1892年に内務大臣、1908年に首相に就任した。視学官にも複数転職しており、そのひとりF.プリングは1894年に就任している。その他、ジャーナリズムで編集長、中等学校や実業学校等の校長というように広がっていく。

拡張講師職は巡回講義を行うので図書館から離れていたため研究活動に支障を来すということがあった。この点も含めて拡張講師をフェロー職に任用することがしばしば検討されたが、ショーを除いて成功しなかった。拡張講師は研究職ではなかったが、このような地方での講義を元にして、拡張講師は研究論文や著作を出版公表している。モウルトン著の『聖書の文学的研究』(1892年)、コリンズ著の『英文学の研究』(1892年)等は世論を動かした著名な書物であった。シラバスが詳細でしっかりしているのも、それを元に大学拡張シリーズや大学拡張マニュアルというテキストも、拡張講師によって著作され、次々と公刊されていった。拡張講師の著作は、大学拡張雑誌の書評欄でたくさん取り上げられている。また、地方センターの所在する町や州で各種委員や実践的な指導を行った拡張講師も多かった。

おわりに

本稿は、イギリス大学拡張運動時代における拡張講師を取り上げた。大学拡張の理念は21世紀の現在の大学の在り方に通じるもので、教養ある市民による民主的な社会の形成を目指して、知的生涯学習を推進してきた。このことは、どこの国の大学にも目指すべきモデルとなったが、モデルとすることで苦しむことになった。イングランドでもヴィクトリア朝には幾つもの市民大学が生まれた。こうした市民大学は大学拡張運動から生まれたが、生まれた途端にそのカレッジの大学拡張意識は薄弱となった⁽²⁵⁾。というのは、教員に余裕がないからである。1895年(明治28年)には全世界で144の大学があるという⁽²⁶⁾が、両大学のように有閑フェロー(教員)がそれぞれ200人も在籍している大学はたぶんなかったであろう。拡張講師の確保こそがどこの大学でも泣き所となったのである。ついですが拡張講師は鉄道と郵便を全面的に活用した。大学拡張を導入しようとする国では、鉄道と郵便がどれくらい国内で発達しているかも成功不成功の一因となった。ここから、理念を共有しながら、試行錯誤をして、それぞれの国に合わせたような大学拡張を発達させることになる。

スチュアートは、本論文でも述べたように、18世紀以来の伝統的な巡回講師の在り方を、大学拡張講師の任用でもって変えてしまった。彼は、大学には拡張講師になる有資格者が多くいても、安易な採用をしなかった。また、たとえ社会での成功経験者であっても、学問的基礎訓練ができていない人は採用しなかった。女性の拡張講師の採用が遅れたのは、旅をする講師ということが負担になると考えられたからである⁽²⁷⁾。イギリスの拡張講師の任用で注目されるのは、大学拡張の理念と精神に合わせて拡張講師の意図的養成を心がけていたことである。それは担当講座の詳細なシラバスの作成指導と試行講義に見ることができる。シラバスの作成指導では、上級拡張講師による教育内容の客観化と正確さを保つようなチェック体制が組まれていたので、講座の大学教育としての品質管理に効力を発揮した。そして、試行講義を行うことによって学問と生活との接点を結びつける視点に磨きかけられるようになっていた。

拡張講師の任用の在り方は、両大学のカレッジにそれぞれ200人ぐらいた有閑フェロー(教員)の時代に確立された。20世紀に入ると、地方にあるユニバーシティ・カレッジの大学への昇格が相次ぎ、独自で大学拡張事業に本格的に参入し始めたので、両大学が全国的に巡回する拡張講師を運用することは少なくなった。しかし、この確立されていた拡張講師の任用の在り方は第2次大戦終了時まで継続した。大戦後、拡張講師の試行講義は廃止され、報酬は月給制に改められた。また大学は多くの非常勤講師も雇用するようになったので、現任教員や専門職社会人が拡張講師を兼職することも多くなった。筆者が大学拡張百年(1973年)を意識して、イギリスの各大学の構外教育部に拡張講師任用の基準を個別に問い合わせたところ、次に掲げるようなダラム大学構外教育部の回答、すなわち、構外教育部の教授職員の任用に関して従う基準は、

- a. 担当する科目に学問的資格を有しなければならない
- b. できれば、その教授能力を明らかにしなければならない
- c. 当該構外区域内でオーガナイズ・チューターを採用されるには、管理、組織能力を示さなければならない

というもので⁽²⁸⁾、他の構外教育部でもすべて共通した採用基準であった。

注

- (1) 香川正弘「一八世紀イギリスにおける自己学習のためのジェントルマンズ・ソサイエティの発達 (1)」『佐賀大学教育学部研究論文集』29-1 (I)、1981年7月、17-32頁；前掲 (2)、30-2 (I)、1983年2月、1-35頁参照。
- (2) 主要な先行研究には次の著作がある。Lawrence Goldman, *Dons and Workers: Oxford and Adult Education since 1850*, Oxford, 1995; N.A.Jepson, 'Staffing Problems during the Early Years of the Oxford University Extension Movement', *Rewly House Papers*, iii, 1960-61, 20-33; Stuart Marriott, 'University Extension Lecturers: The Organisation of Extramural Employment in England, 1873-1914', *Educational Administration and History*, Leeds, 1985; Sheila Rowbotham, 'Travellers in a Strange Country: Responses of Working Class Students to the University Extension Movement—1873-1910', *History Workshop*, 12 (1), 1981. 62-95; Edwin Welch, *The Peripatetic University: Cambridge Local Lectures 1873-1973*, London, 1973.
- (3) 香川正弘「J・スチュアートの大学拡張提案に関する覚書」『研究紀要』四国女子大学、15、1974年、14-15頁。
- (4) *Report of the Eighth Meeting of the North of England Council for Promoting the Education of Women, held at Cambridge, June 11 & 12, 1873*, p.9.
- (5) スチュアートは1874年にストークで開かれた大学拡張導入決起集会で演説し、講師は大学が送り出す最良な人材であると強調し、ダブル・ファーストだ、と力説した。'Proposed Extension of University Education to the Potteries', *The Staffordshire Advertiser*, 31 January 1874, BEMS 1/6,15. ハーディングについては Welch, p.48 による。
- (6) B.B.Thomas, 'R.D.Roberts and Adult Education', *Harlech Studies: Essays Presented to Dr Thomas Jones*, n.n.: University of Wales Press, 1938, p. 1.
- (7) *Cambridge University Reporter*, 57, 3 March 1874.
- (8) BEMS 37/1, qtd. in Welch, p.120
- (9) *Clare College Lodge*, 12 June 1877, pp. 3-4
- (10) BEMS 18/2, 125, ms.
- (11) *Annual Report for the Year 1885-6*, Oxford, 1886, pp. 20-21.
- (12) *Annual Report for the Year ending July 31, 1891*, Oxford, pp. 2-4.
- (13) *Annual Report for the Year 1886-7*, Oxford, 1887, p. 13.
- (14) *Ditto*.
- (15) 1887年の両大学における会議については、次を参照のこと。 *Report of a Conference on*

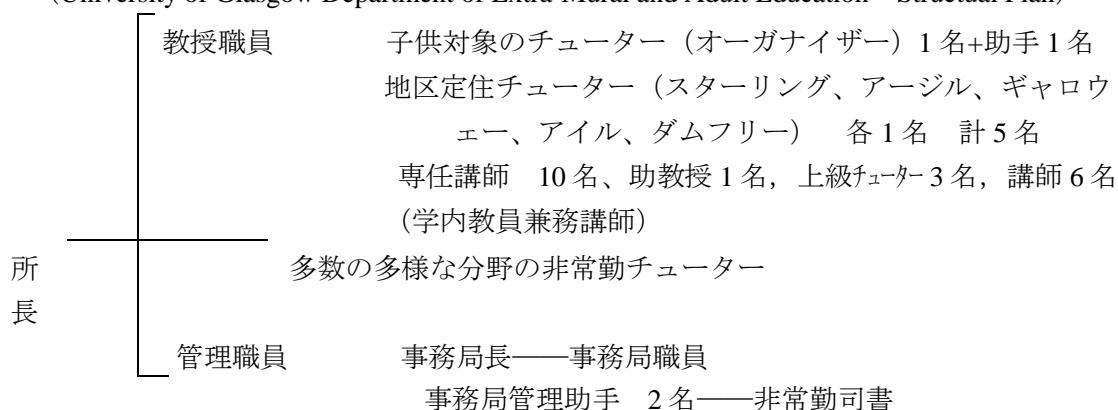
the Local Lectures of the University of Cambridge held in the Senate House, March 9, 1887: Report of a Conference in the Examination Schools, Oxford of Representatives of the Local Committees Acting in concert with the Committee of Delegates of Local Examinations Appointed to Establish Lectures and Teaching in Large Towns and of Other Interested in the Extension of University Teaching on April 20 & 21, 1887; 香川正弘「イギリスにおける1887年の「大学拡張」の熟議」『UEJ ジャーナル』7, 2012年8月号参照、
http://www.uejp.jp/pdf/journal_07/r04.pdf。

- (16) *Report of a Conference in the Examination Schools, Oxford*, p.13.
- (17) H.J. Mackinder and M.E.Sadler, *University Extension, Has It a Future?* London, 1890. pp. 85-99.
- (18) 例えば、ケンブリッジで最も高名な拡張講師であった R.G.モウルトンの 1891-2 年度における一週間のプログラムは、次のような町で講義とクラス指導を行った。Welch, p.125.
- 月曜日 ニューカッスル・アポン・タイン
 - 火曜日 ミドルスバラ
 - 水曜日 午後にパディントン、夜にハックニー
 - 木曜日 午後にエガム、夜にシティ
 - 金曜日 午後にラッセルスクエア、夜にレーウィッシュヤム
 - 土曜日 チェルトナム
- また、拡張講師ハミルトン・トンプソンが 1897 年秋学期から 1903 年 3 月までに、講座講義で訪ねた町及び科目の一覧が、同上書 191-92 頁に掲載されている。
- (19) *Report of a Conference in the Examination Schools, Oxford*, p. 28.
- (20) R.D.Roberts, *Eighteen Years of University Extension*, Cambridge, 1891, p.105.
- (21) 香川正弘「イギリス大学拡張運動の初期段階における発展—大学拡張運動へのオックスフォードの参入」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』5, 2011 年, 102 頁参照。
- (22) Goldman, p.75
- (23) 今回参考にした拡張雑誌は以下の通り。 *Oxford University Extension Gazette*, 1890-95; *University Extension Journal*, o.s., 1890-95, and n.s., 1895-1904; *University Extension*, 1904-07.
- (24) 1909 年における国会在籍の元拡張講師は、スチュアート、モーペス子爵, H.ベロック, C.E.マレット, C.F.G.マスターマン, C.H.ロバーツ, J.A.サイモン, F.E.スミス, H.コックスである。See *University Extension*, 5, February 1906, 2; idem, 6, June 1906, 2.
- (25) Ref. W.H.Draper, *University Extension*, Cambridge, 1923, p. 27; *Handbook on University Extension*, ed. by G.F.Jones, Philadelphia, 1893, p. 137.
- (26) *Oxford University Extension Gazette*, v, 1895, 73
- (27) 最初の女性拡張講師は、ケンブリッジでは 1893 年 11 月に講師リストにエレン・マッカーサーを、オックスフォードでは 1904 年に M.ロイデンを登用した。本格的な女性の登用は第一次大戦で男性拡張講師が戦場に赴いたのでその穴埋めで始まる。Cf. Welch, 1973, p. 123; Goldman, 1955, p. 90.

(28) ダラム大学構外教育部長 J.F.ディクソンからの 1972 年 4 月 4 日付け回答書。
 なおグラスゴー大学の J.G.ワーナーは、手書きで次のような構外教育部の組織図を書いて、教授職員の位置づけを示してくれた(1972 年 1 月 3 日付)。貴重なのでここに掲げておく。香川正弘「イギリスの大学における構外教育活動の実態 (I)」『佐賀大学教育学部研究論文集』25(II)、1977 年、49-72 頁、特に 61, 63 頁参照。

参考事例 グラスゴー大学のエクステンション部門の機構図

(University of Glasgow Department of Extra-Mural and Adult Education—Structural Plan)



香川 正弘 (かがわ・まさひろ)

1942 年広島県生まれ。広島大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程単位取得中途退学、1987 年「イギリス大学拡張成立史研究」で教育学博士(広島大学)。上智大学名誉教授、NPO 法人全日本大学開放推進機構理事長。